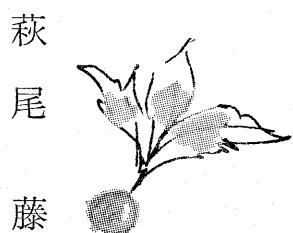


家なき幼稚園のこと



歴史

池田市は明治以後、南から商業都市としてひらけ、また土地高燥で自然環境に恵まれ、住宅地として著しい発展をしている。特に明治四十三年に京阪神急行が開通して以来、人口が急増した。現在の室町幼稚園の前身である「家なき幼稚園」

のあった室町も、当時できた住宅地であった。中産階級の住宅地として室町が整つてくるにつれて、婦人の間から子女の教育をという声が高まり、室町創設當時から在住していた大阪毎日新聞の事業部長であった橋詰せみ郎氏が、当時外国で

行なわれていた「ハウスレス・キンダーガーデン」にヒントを得て、常に花や鳥などを友として、屋外で児童の保育をすることをセッターとする、「家なき幼稚園」を発案された。

おさらのこと自然環境は「家なき幼稚園」の理想をかなえるのに絶好の地だったといえよう。

大正八年四月に、呉服神社の社前において、文字通りの「家なき幼稚園」が開設された。職員は園長の橋詰せみ郎氏以下女の先生三人と小使いさん一人、園児は三十人ほどであった。

しかしすぐに、お天気のよい日はよかつたが、雨や雪の日は園舎がないので困って、その後、九坪ほどの園舎ができる。設備としては、黒板と積木、それに唯一のベビーオルガンがあった。

保育の実際

当時の保育のようすを、主任の山脇治子先生のお話からまとめてみると、次のようなものであったようだ。

池田市は、現在でも比較的緑に恵まれているが、当時はな

一日の始まりは朝の集りから始まつた。園長の橋詰先生は出勤の途中、必ず園に寄られ、童話などいろいろのお話をなさつた。その後、お天気がよければベビーオルガンを乳母車にのせ、ござとお茶の入つたやかんを持って屋外に出た。

園児はござにまるくなつてすわり、先生は乳母車にのつたままのオルガンで、「お手々つないで……」などの歌を教えたり、遊戯をしたり、野に咲く花や草をとつてきて画用紙にはりつけ、人形、顔、自動車などを作る等の制作をした。その後、呉服神社の境内や野原や川原などを自由にかけ回つた。春にはレンゲでかごを編んだり、首飾りを作つたり、さざ舟を作つて猪名川に流したり、桃の木の下でおべん当を広げたりした。また、呉服神社の山道には当時さくらの並木があり、そこにみんなでぼんぼりを作つてつるし、お花見もした。

園舎は住宅地のほぼ中央にあつたので、庭の広いお宅からは時々一同が招待され、存分に遊ばせてもらつて、帰りにはおみやげをいただいて帰ることもあつたという。

このように、「家なき幼稚園」の実績があがるにしたがつて、宝塚、雲雀ヶ丘、箕面等にも同様の幼稚園が設立された。そのうちに、「家なき幼稚園」という名称についているいろと意見が出てきて、事実は「家ある幼稚園」だからといふので、研究の末、「自然幼稚園」と改称されることになつ

たが、園舎の外にあることを原則とする伝統は、ずっと守られた。

現 在

その後、十五年の間「自然幼稚園」は順調に伸びていったが、昭和九年六月に園長橋詰氏が死去され、室町の町内会である室町クラブの手に經營が移され、「室町幼稚園」となつた。

現在の「室町幼稚園」は、緑が少なくはなつたが、伝統的な「家なき幼稚園」の趣旨を生かした保育を、いろいろな試みがなされている。園長の土田先生も、

「幼児の生活は遊びそのもので、それには自然は欠かすことできない」とおっしゃつて、一年のカリキュラムの中にも園外保育を多くとり入れてはいる。

たとえば、近くの猪名川のグランドへよく出かけたり、夏には五月山の家で年長組の子どもだけの一泊のキャンプをするなど、できるだけ自然を生かした行事をするように心がけてはいるようだ。

参考 1 室町々会編「室町の歩み」昭和三十三年

2 談話 「家なき幼稚園」当時の主任 山脇治子
先生 現在の園長 土田素道先生

感 想

自然こそ何ものにもまさる偉大な師である、といわれる。

そのふところにいたかれながら育つ中で、われわれは自然の偉大な力を、はだで学んでいく。それなのに現在、大人は子どもからつきぎと自然を奪っていく。外からも内からも……。美しい山はだがブルドーザーによつて見るも無残な姿にされ、幼いころ魚と遊んだ小川はにごつている。けれども、さがせば自然はまだ残っている。道ばたの小さな花にも、スマッグによこれたつぱさをもつたすずめにも。

ただ、小さな花や鳥を見て“ああ、きれいだな”、“かわいいな”と思う気持ちがどこかにいつてしまつて、泥んこでころんとよこれながらも、はだにふれる土を、「気持ちがいいな」と思う気持ちが忘れられている。ちょっと木に登つて、けがでもすると“もう登っちゃいけません”といわれてしまふ。外からの自然の破壊が進んでいる今日、それをおます内からの破壊でうながすことのないよう、「家なき幼稚園」の存在は大きな警告のように思えた。

あとがき

昨年六月号に、柳瀬陸男先生の講演「宇宙の涯・知識の涯」を掲載いたしました。その講演の初めに、先生はご自分のおうけになった幼児教育のことと話をされたのを記憶と思っています。柳瀬先生の幼稚園、「家なき幼稚園」のことはその後、現職研究会をはじめ先生方の間でいろいろな形でとりあげられ、ぜひ詳しいことを知りたいということになりました。

たまたま、児童科出身で現在池田市に在住の萩尾さんが上京され、津守先生を訪ねられました。そして先生から「家なき幼稚園」の話をきかれて、"それならば池田に住んでいる私が調べましょう"といつてくださいました。そして、池田に帰られてしまふ。呉服神社に行かれ、前のようにまとめて送つて下さいました。

その後、柳瀬先生からお電話をいただき、大阪へ行かれた折に、昔の「家なき幼稚園」の主任、山脇治子先生（前出）に会われて、"貴重な本を拝借してきました"と二冊の本を見せてくださいました。そして"実は私は、当分多忙で原稿を書くことができないので、この本をお読みになつて雑誌に紹介したら……"とおっしゃつてくださいました。

それで今後その本の抜すいを順次掲載していきたいと思ひます。

（写真 吴服神社境内で 47ページ）

（編集部）